

# もっと知りたい ふるさと

63

## 我が郷土の長野盆地(善光寺平)

長野盆地が誕生したのは、長野盆地西縁構造線の西側が上がり、東側が下がるとい

再活動が始まった約60〜50万年前と考えられている。盆地側が周りより低くなると、周辺の河川がそこに流れ込み、現在の盆地西縁部を中心にした細長い凹地が次第に形成され、発生初期の盆地を形成した。凹地は長野市から飯山にかけて形成され、豊野町付近が中心部となる。



姨捨 SA から善光寺平を望む

約40〜20万年前頃は西側山地の隆起が更に続き、それに伴い盆地西縁部に複数の断層が形成された。これは西側山地が隆起するに連れて落差を大き

くし、盆地の西縁部を明瞭につくり上げていき、階段状の地形が形成され地層も変化した。

南郷層が堆積したのは、およそ20〜10万年前の時代である。この堆積後、西山山地は急激な隆起を始め、盆地より新しい丘陵群が形成された。

この隆起運動により、西縁部の南郷層はいずれも盆地側へ傾いた。この隆起運動後に堆積したのが、現在盆地の両縁に分布する扇状地堆積物である。これらの大部分は、最終氷期(7万年前から1万年前まで)の間に堆積した。なかでも河東山地の隆起運動は激しく、この時期に大量の粗粒堆積物を下流に供給した。

このように長野盆地は、西山山地の隆起運動と河東山地の傾動運動が断続的に行われて地形を形成し、堆積物が堆積しながら、現在の盆地が形成された。

昔から長野盆地の平坦部は善光寺平と言われ、北東から南西方向に40kmの長軸、中央部の最大幅が約10km、面積およそ300平方kmの規模を示し、日本における典型的な山

間盆地の一つである。

周辺の山地は標高800m以上の高さを持ち、盆地内は標高315〜400mの平坦部が最も広い面積を占め、この盆地内を流れる千曲川は、盆地南端から北端までの流れが標高わずかに40m下がる程度に緩やかであり、千曲川沿いには、自然堤防や後背湿地からなる氾濫原が広がっている。

千曲市は、長野盆地の南端に位置し、面積は119.93平方kmである。

長野盆地は、上高地を源とする梓川が、松本平で周辺からの河川を集め犀川と名前を変えて、善光寺平で本流の千曲川に合流し、大量の堆積物で扇状地を形成している。

一方、東縁部では河東山地からの尾根が、盆地に沈み込むように伸び、これらの尾根と尾根との間を埋めるように大きな扇状地が発達する。また、扇状地と扇状地の間には、低湿地(雨宮・清野他)が見られる。このような東縁部の地形はあたかもリアス式海岸を思わせる出入の激しい山麓線となり、直線的な西縁部と

は大きな違いが認められる。千曲川は、盆地南部では東側を蛇行して流れ、犀川と合流すると直線的に北東方面に向かつて飯山盆地に流れ込む。この千曲川の両岸には、氾濫原が広く発達する。氾濫原は主として自然堤防・後背湿地と河床とからなり、盆地の低湿地帯を形成している。

昔からこれらの氾濫原地帯は、洪水の常襲地帯だったが、洪水のたびに河川が運搬した土砂を堆積した(横田・塩崎・屋代・雨宮・戸倉)。これが自然堤防や中州となり、弥

生時代から現在まで多くの人々が生活する場所となっている。

八幡 宮澤 保徳

